



Title	第二言語の音韻知覚学習に関する実験的研究：日本人の米語/r//l/音知覚
Author(s)	山田, 玲子
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40973
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	山田 玲子
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 13457 号
学位授与年月日	平成 9 年 12 月 4 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	第二言語の音韻知覚学習に関する実験的研究 —日本人の米語/r//l/音知覚—
論文審査委員	(主査) 教授 吉田 光雄 (副査) 教授 中村 敏枝 助教授 狩野 裕

論文内容の要旨

人間は誰でもそれぞれの発達過程において、複雑な構造をもった言語をごく自然に獲得し使用する。しかしながら、一旦母語が確立すると、他言語の再獲得はしばしば困難に直面する。音声言語を用いたコミュニケーションにおいて基本的な単位である音韻の学習も同様で、母語の音韻は誰もが自然に学習するが、非母語の音韻の聞き取りや発音の学習は、必ずしも容易ではない。一方、国際化にともない、母語以外の言語を第二言語として獲得し使用する機会は増している。本論文では、学習が極めて困難な例といえる、日本語話者(日本語を母語とする者)による米語/r//l/音の学習を例にとり、その知覚(聞き取り)や生成(発音)の特徴、学習に及ぼす年齢の効果、実験室における訓練の効果等を明らかにした。

第1章「序」および第2章「背景」では、音声コミュニケーションおよび音声知覚・生成に関する研究の流れを概説し、本論文の理論的な背景を述べた。多くの研究によって従来明らかにされてきた実験事実をまとめると次のようになる。(1)音韻知覚は生後12ヶ月までの間に母語に特徴的なものに変容する。(2)一旦母語の音韻を獲得した後に第二言語を学習する際、母語の音韻で代用できないような音韻については、その学習に困難が生じる場合がある。(3)第二言語音の訓練は、成人に対しては限られた効果しかあがらない。(4)音韻の知覚と生成の間には密接な関係が存在する。

周知のごとく、日本語話者は米語の/r/と/l/の知覚や生成が出来ない。/r/-/l/という基本的な音韻対立が欠けているという特徴をもつ日本語音韻システムは音声研究においては貴重な題材であり、そのことを検討した研究報告は国内外に多数を占める。本研究では、単に「聞き取れない、発音出来ない」という記述にとどまらず、知覚・生成のストラテジーを明らかにすること、および知覚—生成のリンクという全体的観点と音声学習という力動的観点を取り入れることを企図した。

第3章「知覚」では、種々の知覚実験を通して、従来の研究報告における(1)日本語話者は米語/r//l/音が聞き取れない、(2)米語話者は/r//l/音を範疇的に知覚するのに対して、日本語話者は連続的に知覚する、という結果に加えて、以下の点を明らかにした。(1)日本語話者は米語話者が/r/または/l/と同定する音声の一部を/w/と同定する。(2)個人差を

考慮した分析により知覚のストラテジーがより明らかになる。(3)日本語話者は呈示された刺激範囲の影響を米語話者に比較して強く受ける。(4)日本語話者は米語話者とは異なる手掛かりを用いて/r//l/音を同定している。(5)日本語話者の/r//l/音知覚は、ターゲットの/r/または/l/を含んでいる単語の主観的親密度の影響を強く受ける。これらの結果から、日本語話者が米語/r//l/音を知覚する際のストラテジーが明らかになった。

第4章「生成」では、発話音の音響分析を行い、第3章で明らかにした日本人が用いる知覚の手掛かりが、生成でも用いられているかどうかを検討した。その結果、/r/と/l/を区別する手掛かりとして、米語話者は知覚・生成ともに第3フォルマントを用いていたのに対して、日本語話者は知覚・生成ともに第2フォルマントを用いていた。知覚と生成ともに同じストラテジーを用いることから、第二言語音の獲得過程における知覚と生成の間のリンクの存在が示唆された。

第5章「年齢と獲得」では、帰国子女を中心とする米国に長期滞在経験を持つ約150名という多数の日本語話者の米語/r//l/音の知覚・生成能力を測定し、海外滞在経験を持たない日本語話者や米語話者の能力と比較検討した。その結果、米語環境に曝されることにより、/r//l/音の学習は知覚・生成ともに促進されることが明らかになった。さらに、より若年齢におけるより長期にわたる経験はより学習を促進することが示された。

第6章「訓練」では、実験室での学習実験を行い、十分な量の適切な訓練を行うことにより、成人でもネイティブに近い知覚能力を獲得することができ、いったん獲得した能力は6ヶ月後でも保持されていることが明らかになった。

第7章「考察」では、第3～6章の実験成績を総合的に検討し、最近の第二言語音の獲得に関する理論との合致性等も考慮して考察を加えた。

以上の実験的研究を通して、第二言語音の知覚学習は、発達過程において生物学的な基盤（年齢による学習能力増減等）のうえに、母語や教育の影響を受けつつ成立していくことが明らかになった。従来、これらの問題は神経科学、知覚心理学および音声科学等種々の立場から、別々の問題として検討されてきた経緯がある。しかしながら、本論文では人間科学の立場からこの問題を捉え直し、さらに音韻は学習によって獲得されるものであるという観点から、第二言語音学習を総合的に捉えて、その学習過程を分析し、学習に影響を与える諸要因の相互作用の一部を明らかにした。従って、音声学習という分野への理論的貢献を果たしたといえる。また、効果的な訓練方法を提示し、訓練効果の評価も行ったことから、理論的貢献にとどまらず、外国語教育に対する社会的要請に応えるものでもある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、第二言語の音韻知覚学習に関して、米語/r/, /l/音を例示的に取り上げ、その知覚・生成・習得に関する過程を、一連の実験により、明らかにしたものである。一旦母語が確立すると、他言語の音韻の聴取や生成は容易ではなく、特に日本人にとって、同音韻の学習は困難と言われており、日米の多くの研究者がこの問題に関心を示して来た。

まず、文献的研究により問題の所在を探り、明らかにされた点を検証するための知覚実験を行った。その結果、/r/, /l/音の間に/w/音が存在することを見出し、範疇的知覚、単語親密度の観点から考察した。

生成に関する実験においても、知覚実験と同様の結果を得、知覚と生成の相互連関について論じた。

そして獲得に関する章では、帰国子女を用いて、米国滞在経験と実験結果との関連を分析し、音韻習得の臨界点として、7、8歳の年齢段階を見い出したが、これを打破する訓練の方法についても、実験結果に基づいて示唆を与えた。

目的に至る研究プロセスが論理的に一貫性を有しており、明快に組み立てられた論文である。10年間にわたり、延べ800人におよぶ被験者について実験を行い、日本人のみならず、比数対照群として帰国子女、米国人をも被験者としたこと、さらに、人工音合成による微細な刺激音の作成、厳密な実験条件の統制、最新の音声分析装置ならびにコンピ

ュータを駆使してのデータ解析など、困難な条件を克服しての実験的成果であった。勤務先における研究環境を十分に生かし、高度の機器・装置を用いて緻密な計画の下に積み上げられた実験といえる。

そして、さらに特筆される点は、成果を第二言語獲得学習に応用せんと企図したことであり、実験室内の基礎的研究のみにとどまることなく、実用面に生かした点である。(論文完成後、言語学習ソフトの開発に着手し、成績を得ている。) 言語教育の現場における方法論的寄与など、今後の展開が期待される場所である。

以上のごとく本論文は、長年の真摯な研究の成果であり、その独創性、将来性において、高い学術的価値を有するものである。

審査委員会は、本研究科における学位請求論文として、質量ともに十分のものであると判定した。